

# いろいろなお葬式の話

遺灰を海に撒く、森に埋めてもらう？  
自由なお葬式は、どこまでできるのか…

金丸 弘美 (ライター&コーディネーター)

お葬式に行って疑問に思われたことはないだろうか。なぜ戒名がつくのかとか、なぜ喪服は黒なのかとか、墓は自宅に建ててはいけないのだろうかとか、なぜ「喪中につき賀状お断り」なのか、などである。

そもそも戒名とは、出家をして仏の弟子になることなのである。この戒名が一般的になってきたのは江戸時代からのことだと言う。

「徳川幕府は、キリスト教徒の禁令を出し、寺請制度を定め檀那寺による檀家管理を行った」(神崎宣武著「神さま仏さまご先祖さま」小学館)のである。それで寺が村の人々の戸籍を管理し、また、葬式まで行うようになった。そこから、お寺の僧侶が出家をするときに戒名を付けたことから、一般の人も寺で行う以上、僧侶と同じように出家させる意味から戒名がついたのだ。

墓や仏壇というのも、寺請制度が徹底化してから広がっていったらしい。

最近、東京の古い農家を何軒か訪ねたことがあるが、家には大きな仏壇があって、「ここは、何代目ですか?」と訪ねると、必ず「江戸まではわかるんだが」という返答が返ってきた。つまり、逆にいうと寺請制度ができたから、江戸までは、わかるようになった、と言い換えることができる。

喪服は昔は白が一般的だったそうで、黒になったのは、つい最近のことらしく、戦前に戦争で葬式が増え、物質不足であったこと、貸衣装屋の白喪服が汚れが目立つということから、黒になったということに起因しているらしい。

墓はさすがに法律で勝手には建てられないが、記念碑だと建てることできる。

喪中とは、日本では四十九日間、つまりこれは、死体が地に還る期間で、四十九日を明けると喪があける。その間は、人の魂は、まだ遺体にあると考えられたからだ。四十九日で喪が明けると、年末に、その年に人が亡くなったからといって、必ずしも賀状を失礼をする必要はないということである。

そんなことを考えるのも、葬儀に出かける度に、形式的なものが少なくなく、あまりに本質を見失って、形にばかりに気を取られているのではと思うからだ。

こないだ農家の方のお葬式に行ったら、でかい花輪、それもプラスチック製の使い回しのいくつもたててあって驚いた。これなんか、もう、形になっているものの典型だろう。

さて、先日、残間里江子さんプロデュース「大人から幸せになろう」というトーク形式のフォーラムがあり、ここで作家の新井満さんは、自分のお葬式のテーマを作詞・作曲しているということで、それが披露され、死に際のどのタイミングから曲が流れるのか、キュー出しということまで決めているとのことだった。

隣に座っていた、久米麗子さんは、ご主人の久米宏さんと、お葬式をどうするかと、よく話すのだそうで、確か久米宏さんは、散骨だった思うのだが、奥さんの麗子さんの理想は、ゴミとしてだれともわからないようにと、葬られるという、仰天な回答だった。

ゴミは極端かもしれないが、しかし、形式的な葬儀ではなく、自由な葬儀はできないものかと考えてみた人は多いことだろう。

私の行ったお葬式で印象的だったのは、いくつかある。

一つは音楽家八木正夫さんのお葬式で、これは祭壇も式場もすべて白で覆われ、棺の横にステージがあり、そこでは、マイクとドラムとベースとピアノがあって、次々に弔問に訪れたミュージシャンが音楽を演奏するというものだった。



その曲を和田誠さんが紹介する。そして弔問客は献花をし音楽を聴きながら故人を偲ぶというものだった。会葬の記念として配られたのはテレフォンカードで、そこにはカードが2枚。いずれも和田誠さんのイラストで、1枚は八木さんの似顔絵がカラーで描かれ、もう1枚はモノクロのピアノが描かれていた。その下には、「八木は、いつもみんなと話すことが好きでした。天国の八木に何度も何度も電話をしてください」とあった。こんなにも生前の人と人柄を表現した葬儀を見たことはなかった。

二つ目は、私の映画の先生だった映画評論家でありジャズ評論家であった野口久光先生の葬儀で、このときも和田誠さんが司会で、棺の横に白い布で覆われたステージがあるというスタイルだった。演奏のピアノは野口先生のご子息の野口久和さんで、その他は会葬に訪れたミュージシャンが演奏するというものだった。葬儀場の壁には野口先生が入院中、いずれ個展を開催する予定で100点を目指して描いていたという、大好きだったリリアン・ギッシュを始め数々の映画のスターたちのポートレイトが飾られたのである。

最後の送り出しのとき、仕事先からやっととどり着いたというデキシーランドのジャズバンドのメンバーが聖者の行進を演奏し見送った。

三つ目は、三洋証券の名誉顧問であった土屋陽三郎さんの増上寺で行われた葬儀で、一切の花も香典もなしで、葬儀会場は大きな写真と白い菊の花のみ。弔問した者は菊の献花をし、会場に並んで立つ親族の方々に挨拶し、少し思い出を話してお別れするという、実に清廉な葬儀だった。

そんなわけで、形にとらわれない、自由なお葬式に惹かれている最近である。

では、他にどんな新しい葬儀があるのか、また、実際にどんなものがあるのだろうか。

かつて、ハワイに、伝説のサーファーのデューク・カナハモクの取材に行ったことがある。カナハモクはオリンピックの

水泳100メートルのハイアンとして初めての金メダリストであり、のちに親善大使を務めた。

ハワイで、子供の時にデュークによく遊んでもらったという人に会ったのだが、この人によるとデュークの葬式は、カヌーでワイキキの海に漕ぎ出し、遺灰を海に撒いたというのである。そのときににわかにかが曇り、波がうねり、デュークの魂は、波に乗って行ったということだった。サーファーとしてふさわしい、誰もか憧れる最後の姿だろう。

では日本でも遺灰を海、あるいは山に撒くことはできるのか。これは実際に行われていて、2001年10月現在で、586回、1039人。そのうち、海は832回あるという。さらに、山では185回、空に15回、川で3回、驚くなかれ自宅の庭が4回ある。

この遺灰を自然に戻すのは、市民団体「葬送の自由をすすめる会」が1991年以来進めているもので「自然葬」と呼ばれるものだ。遺灰を撒くということは、節度をもって行われる限り法律的には、問題ない。

周辺の人たちにも尋ねてみると、意外や、この遺灰を撒くという行為には肯定的な人が少なくない。

そのまま自然に眠るとするのはどうだろう。墓石というのは、重々しいし、第一郊外の切り開かれた山地に突然墓地団地が出現したりすると、なんだか景観が壊されたようで、なんともやりきれない感じがするものだ。

そんなことを思っていたら、自然の山の中で眠り、墓を建てずに好きな木を植えてもらおうというのが本当にあると知って驚いた。「樹木葬」と呼ばれるものだ。これは森の中に遺骨を埋めて、好きな木を、墓石の代わりに植えてもらうというものである。岩手県一関市にある大慈山祥雲寺が行っているもので、れっきとしたお墓なのである。ただし墓石はない。骨壺もない。それでいてきちんとお寺が管理して供養も行われるというものなのである。

植える木は、エゾアジサイ、ヤマツツジ、ウメドモキ、ナツハゼ、エゾユズリハ、バイカツツジ、イヌツゲなど、自由に選ぶことができる。

しかも、この自然の樹木の森で大きくなった間伐の材木は、炭にして、川の浄化のために使われているということらしいから、なんともエコロジカルなお寺さんではないか。

そういえば、イギリス在住のエッセイストの岩野礼子さんと話していたら、イギリスでは、ごく普通に、墓地にピクニックに行くのだそうで、「今日は、詩人の墓で、ずっと一緒に過ごしているいろいろお話したわ」なんてことを言っていた。

僕は、毎年、吉野孝雄さんのお誘いで、夏、明治のジャーナリスト宮武外骨の墓参り「外骨忌」に行くのだが、このときのメンバーが豪勢で、赤瀬川原平さん、南伸坊さん、森まゆみさん、坪内祐三さんなどが、いつだったか、南伸坊さんが、宮武外骨のそっくりの衣裳で現れ、墓の後ろに立って、「墓から挨拶に来た宮武外骨」ということで、みんなで記念写真を撮った。これは伸坊流の、歴史上の人になりきってしまう「歴史上の本人」パフォーマンスだったのだが、この後の、みんなでの食事会は、おおいに盛り上がったのだった。

これが「樹木葬」で森であれば、ピクニック気分、しかも森林浴できるのではないか。もっとこんなお寺さんが増えるといい。



チベットに毎年行っているという作家の渡辺一枝さんは、チベットの鳥葬、つまり遺体を解体して鳥に食べさせるという葬儀に惹かれるということを話していらしたが、この天に還るという行為は、これは日本じゃ無理だろうけれど、でも自然に還るということでは、「樹木葬」同様に、なかなか優雅に思えるのだ。

最近、人工衛星の打ち上げロケットで宇宙に遺灰を飛ばす宇宙葬もある。これは遺灰の一部を小さなカプセルに入れてロケットで打ち上げてもらう。日本にも代理店があり、遺灰を見送る葬儀ならぬ打ち上げのツアーもある。

自然に帰すのではなく、逆に、亡き人の一部を傍らにいつも置いておくということでは、遺骨をプレートにしてしまう「エターナルプレート」というのがある。これは遺灰とセラミックスを混ぜて加工するのだそうで、最近、行われるようになったもの。また、遺体の一部の細胞を採取してDNAをペンダントにするというのも最近はある。これは生きているうちから簡単にできるから、恋人同士の、あるいは夫婦の愛の証にするというのもいいかもしれない。

また生きているときに葬儀を行う生前葬というのも例は少ないがある。実施してくれる葬儀会社もある。生前葬は、女優の水ノ江滝子さんが行って、一時話題になった。もっとも普通の人ができるには、周りの人の理解を得られないとなかなか大変だということだ。確かに、まだ生きているのに、葬式ですと言われても、どんな顔をしていけばいいのか戸惑うに違いない。でも生きてるうちに、自分を見つめるというのでは、これも一つの新しいあり方だ。

これまで紹介してきたものは特異なものに見えるかもしれないが、それだけ人のライフスタイルが変化してきた証で、葬儀も、新しい自己を反映するものが、いくつも今生まれ始めているのである。宇宙葬や生前葬までいかなくとも、生前に予算や供養、葬儀の内容まで決めておくという生前契約という形も増えている。これからは、もっと形だけに流されないお葬式が増えてくるに違いない。



#### 参考文献

「神さま仏さまご先祖さま」神崎宣武著 小学館  
「お葬式のナゾ エッ! ほんと?」永岡書店  
「自由葬」小口達也著 DANぼ